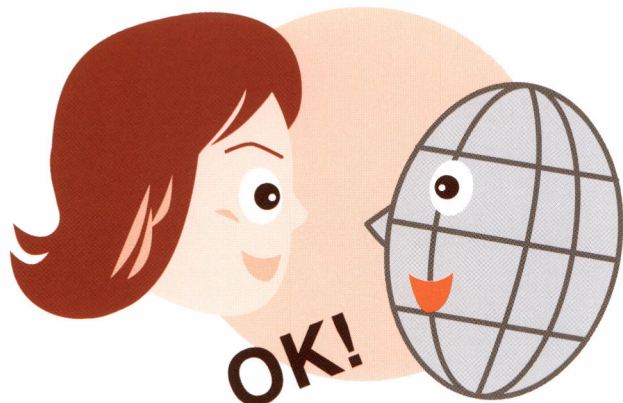


早大生の将来設計



英語能力

コミュニケーション重視の割にはちょっと心許ない英語力…。世界では通用しないんじゃないかな。英語に弱い早大生の間違ったイメージを破壊すべく、頑張らなくちゃ！

将来に向けて必要な能力

さすがネットワーク志向の早大生！これからの競争時代を生き抜く最大の武器は、語学と専門知識に裏打ちされた創造的なコミュニケーション能力であることをしっかり認識してるね。

将来に向けての準備

「大学はレジャーランド」なんて言っていたオジサンたちがいたそうだけれど、もはや昔話！日本株式会社も余裕なんかもうないよ。勉学は大学の専売特許、今のうちにしっかり準備しなくちゃ！

将来の進路

「在野精神」は早稲田のバックボーン！でも進路がワンパターンだと、「輝く理想」も「遍く天下に」広まらないな。在野精神を生かす場所は多様性がなくちゃいけないし、そのパターンも時代とともに変化するよね。

キャンパス・ライフの充実の鍵

キャンパス・ライフを充実させるキーポイントは「専門知識」「友達」「教養」のトライアングル！結構、まともじゃないか…。大学は勉強しながら人間を成長させる知的ハブだもんね。

友達

必要第2外国語

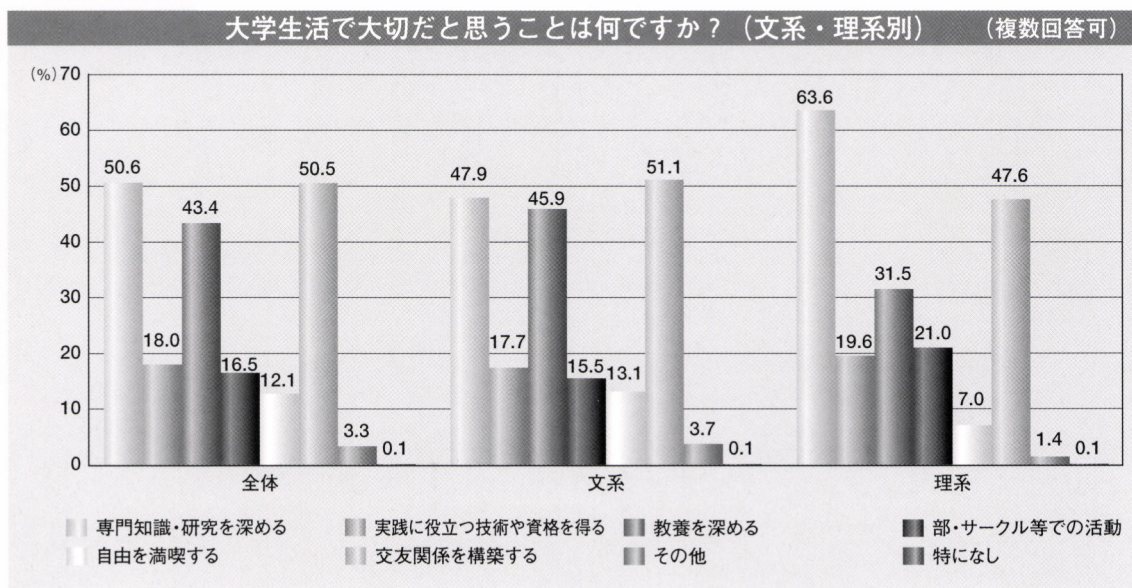
3人に1人が中国語重視とは、必須語学にも反映するグローバル化の波か…。でも多様性も大事だね。どうも女性の方が好奇心旺盛で多様性に強いみたいだ。「女子大生亡国論」は破綻し、いまや「女子大生（早稲田）救世論」かもね。

専門知識

教養

(1) キャンパス・ライフの充実の鍵

早大生にとって、キャンパス・ライフの最重要項目は「専門知識・研究を深める」(50.6%)と「交友関係を構築する」(50.5%)です。ともに50.0%を超えるとともに、ほとんど差がありません。これに「教養を深める」(43.4%)を加えたベスト3が、「実践に役立つ技術や資格を得る」(18.0%)、「部・サークル活動等での活動」(16.5%)、「自由を満喫する」(12.1%)などを大きく引き離しています。



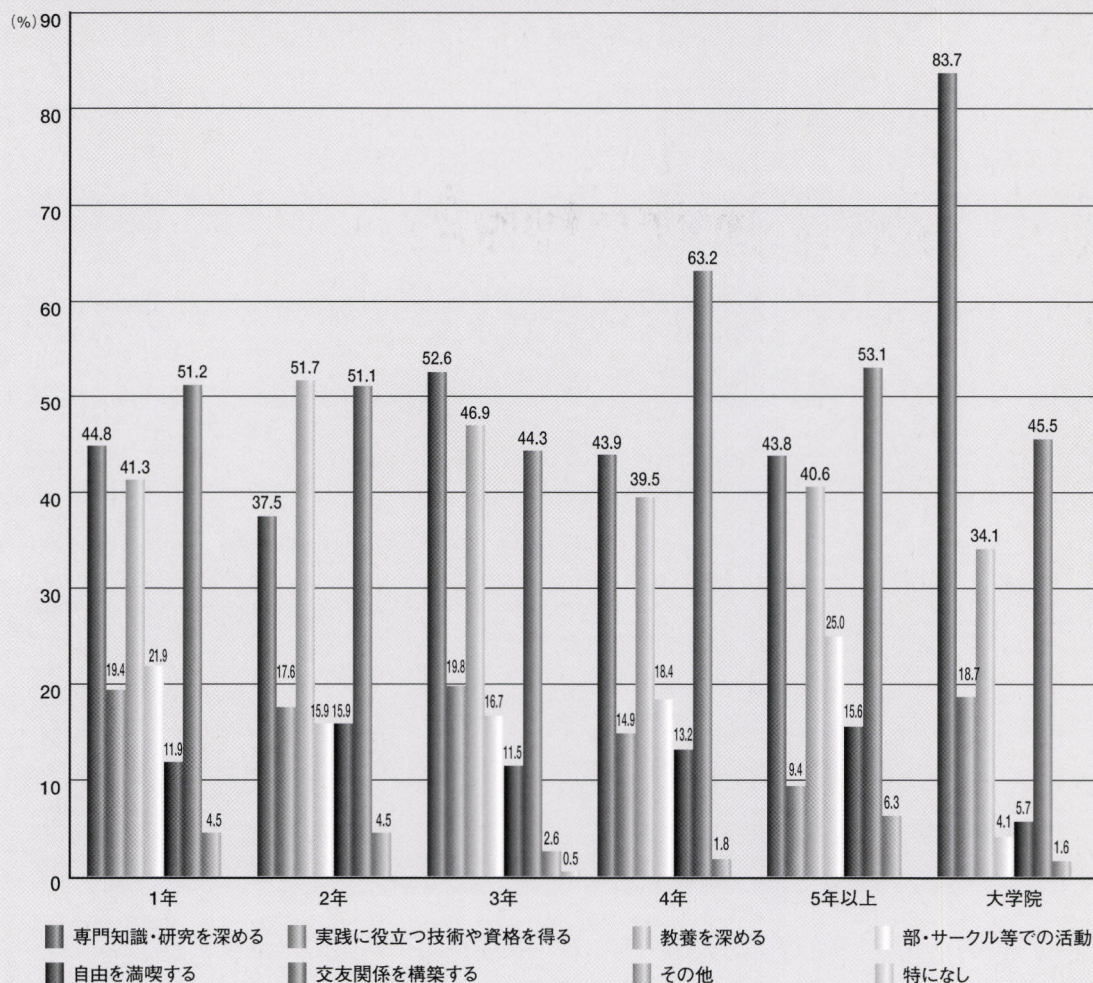
「勉学」と「友達」が大事という、とても当たり前のことが最重要視されているわけですが、文系と理系では内容が少し異なります。文系では「交友関係を構築する」(51.1%)がトップですが、2位「専門知識・研究を深める」(47.9%)、3位「教養を深める」(45.9%)との差があまりなく、3つがほぼ5ポイントの範囲に納まるのに対して、理系では「専門知識・研究を深める」(63.6%)が「交友関係を構築する」(47.6%)、「教養を深める」(31.5%)を大きく上回ります。どちらかというネットワーク重視の文系と、専門知識重視の理系というイメージが浮かび上がってきます。

面白いのは、理系の方がやや重視傾向が強いとはいえ、両者（文系：15.5%、理系：21.0%）とも「部・サークル等での活動」にさほど大きな重点を置いていないことです。この点は、「部・サークル等での活動」を軽視しているわけではないと思いますが、かつてのように早稲田の本質がそうした項目にのみ特化しているような風潮が変化しているのでしょうか。

早稲田のキャンパスでは、60年代から70年代は学生運動が吹き荒れ、80年代から90年代にかけては「(日本の)大学はレジャーランド」の代表格のようにマスコミに揶揄されましたが、少子化やグローバル化により大学間競争が激化したため、大学の持つ本来の使命と機能が再認識されているのかもしれません。

学年別では1年と4年で「交友関係を構築する」がトップです。特に4年生では63.2%で、2位の「専門知識・研究を深める」(43.9%)と20ポイント近くの差があります。1年生にとっては大学入学後の新しい環境での学友作りが最重要課題であるでしょうし、4年生にとっては就職活動の影響、さらには社会人としてのネットワーク、早稲田大学のOB・OGとしてのネットワークの構築が強く意識されているものと推測されます。

反面、2年生では「教養を深める」(51.7%)が少差ながら「交友関係を構築する」(51.1%)を抑えてトップとなります。おそらくこの時期が大半の早大生にとって、キャンパス・ライフが最も安定し、また時間的にも余裕ができるためでしょう。3年生になると「専門知識・研究を深める」(52.6%)が、「教養を深める」(46.9%)、「交友関係を構築する」(44.3%)よりも高くなります。キャンパス内での交友関係も一段落すると同時に、専門科目の勉学が中心になるからでしょう。当然のことながら、大学院学生にとっては「専門知識・研究を深める」(83.7%)が圧倒的なトップを占めます。

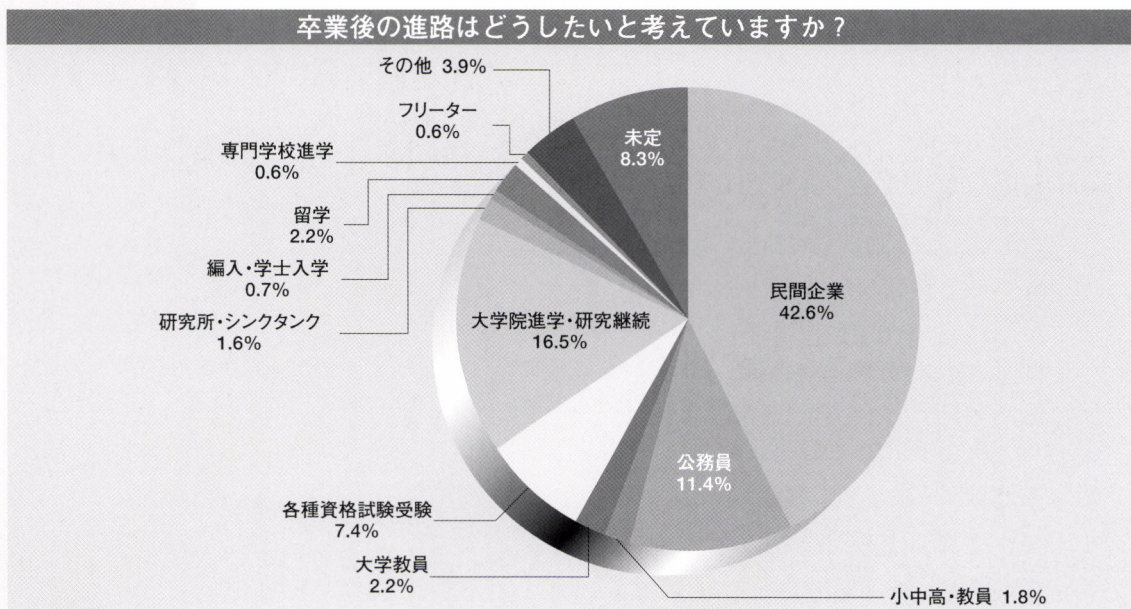


学年を問わず「交友関係を構築する」が重要な要素ですが、それは早稲田大学を志望する動機にも表れています（第1章P.4のグラフを参照）。早稲田は日本で最もエキサイティングで、活気と多様性に富むキャンパスと評されていますが、早稲田を選んだ理由として「多様な交友関係が得られそう」（26.4%）が4位に挙げられています。ある意味でエキサイティングでワイルドなキャンパスを売り物にしてきた校風も、多様な人間関係の構築に貢献していることを考え合わせると、早稲田に入学する人はネットワーク志向型人間が多いのかもしれません。

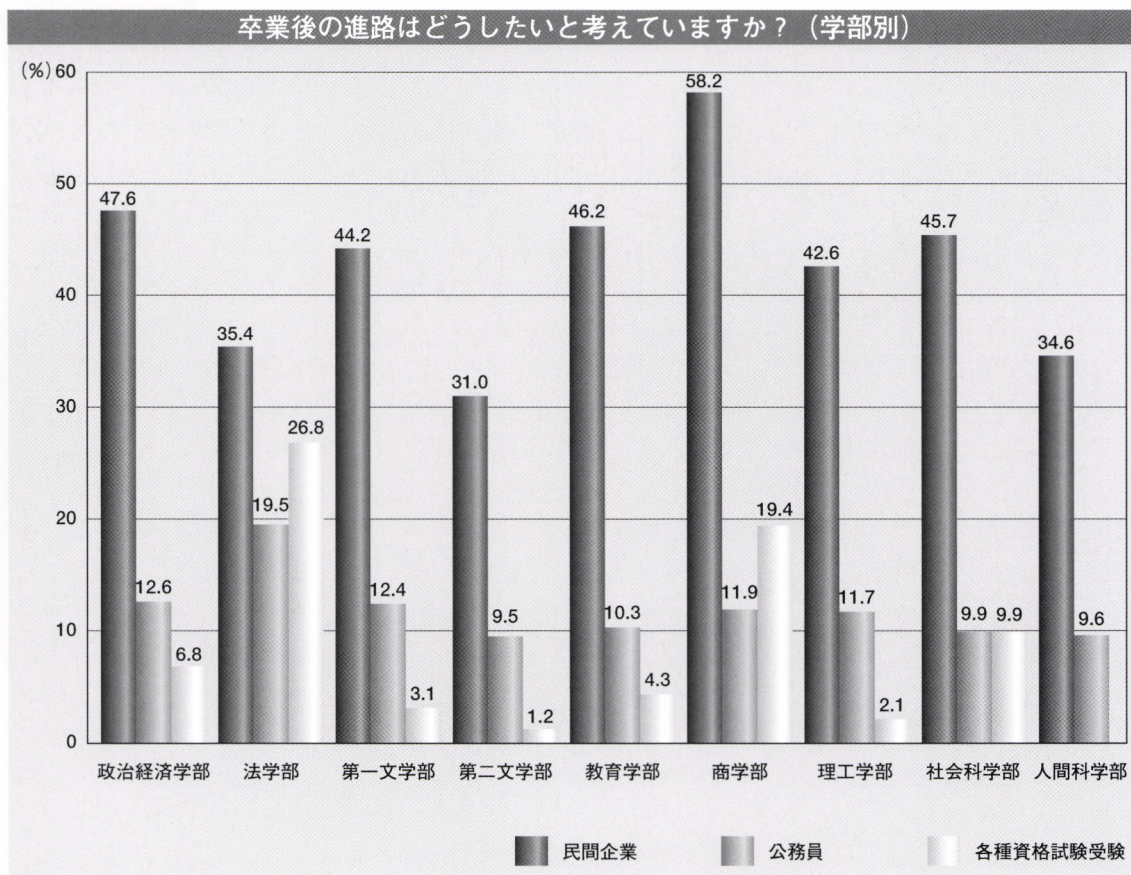
最後に、キャンパス・ライフの重要要因と深く関連している変数は「大学生活の充実度」です（第1章P.5のグラフを参照）。この点に関しては、早大生の半数以上の54.2%が「充実している」と回答しており、「やや充実している」（30.9%）を加えると実に85.1%がポジティブな姿勢を持っていることが分かります。このことから、早大生は早稲田カラーに強い憧れと期待を抱いており、大学がその期待に応え、学生が充実した学生生活を送ることができるキャンパスを作り続けることが最も重要な課題だと言えます。

(2) 将来の進路

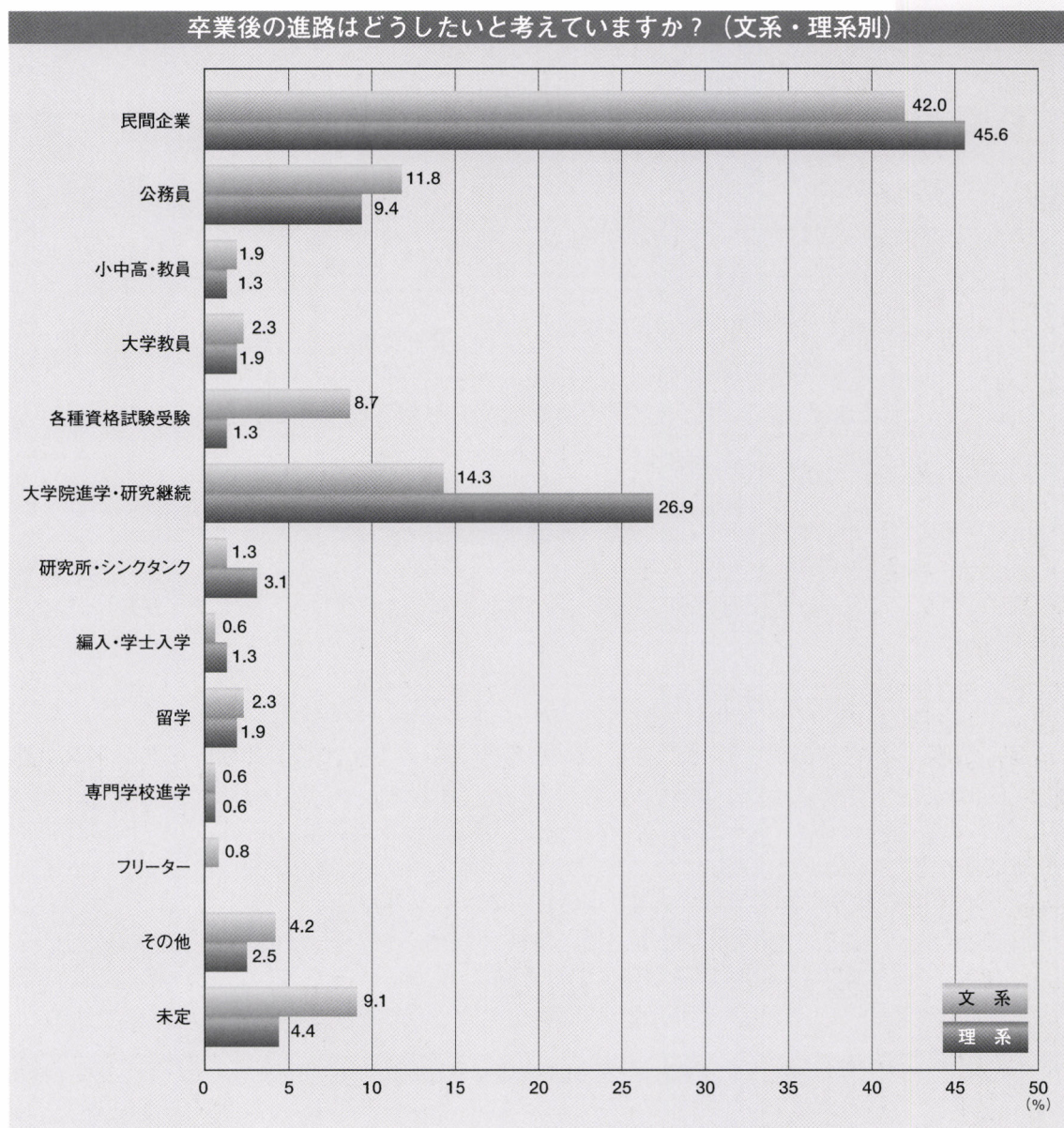
「民間企業」(42.6%)を挙げた人が最も多く、以下、2位「大学院進学・研究継続」(16.5%)、3位「公務員」(11.4%)、4位「各種資格試験受験」(7.4%)と続きます。在野精神を校風とする早稲田大学の学生が「民間企業」を志望するのは当然の帰結かもしれませんが、学部別に見ると学問分野の性格を反映した相違が見られます。



「民間企業」志望が最も強いのは商学部で、実に58.2%に達します。これに対して法学部では、「民間企業」(35.4%)が1位ですが、2位「各種資格試験受験」(26.8%)、3位「公務員」(19.5%)もかなり接近しています。「各種資格試験受験」が多いのは司法試験の影響でしょうが、「公務員」志望が最も強いのも法学部で、2位政治経済学部(12.6%)、3位第一文学部(12.4%)、4位商学部(11.9%)などに比べ顕著です。



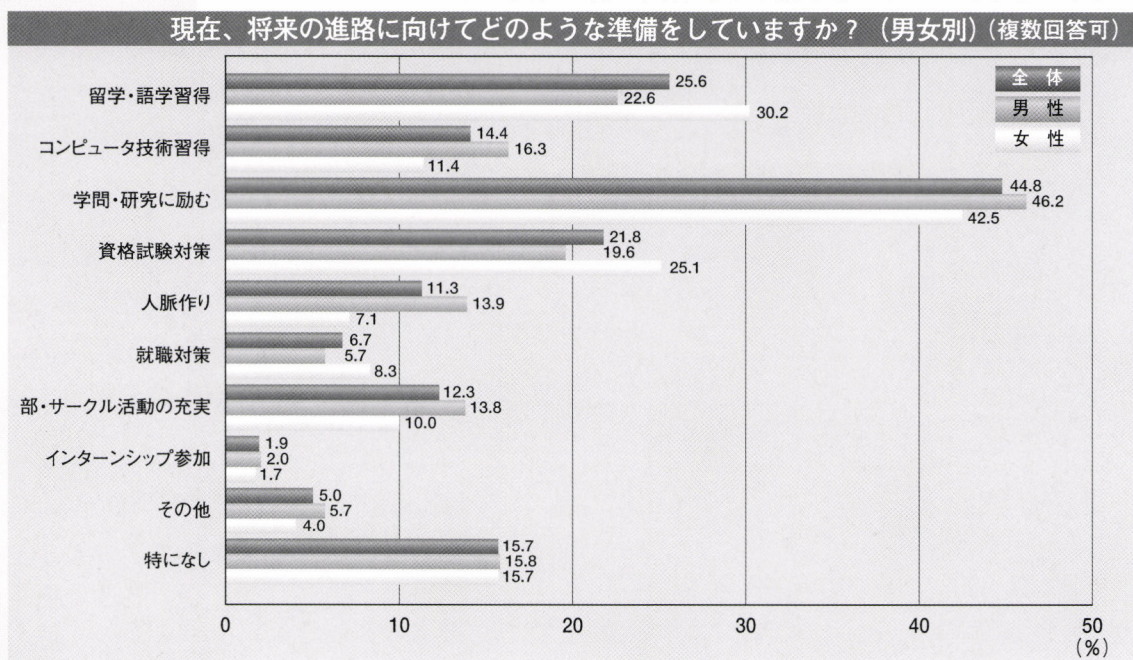
文系、理系の間で最も顕著な違いは「大学院進学・研究継続」に関してです。文系・理系ともに「民間企業」が1位（文系：42.0%、理系：45.6%）ですが、文系の「大学院進学・研究継続」が14.3%なのに対し、理系は26.9%でほぼ2倍です。こうした傾向はかなり以前からありますが、今後、ロースクールなどの専門大学院が設置されることにより、文系の「大学院進学・研究継続」がどのくらい増加するかが興味深いところです。次に顕著なのは、「各種資格試験受験」で、文系が8.7%なのに対して理系は1.3%となっています。これは司法試験や公認会計士試験などの国家資格試験に挑む学生が、法学部、商学部を中心に多いからでしょう。



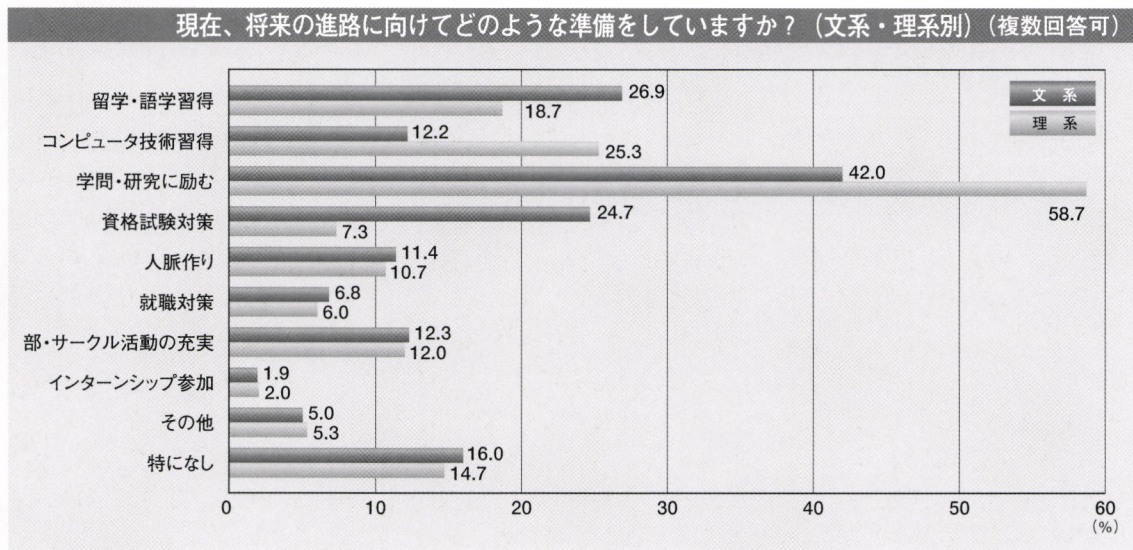
大学院学生に関する特徴は、文系では「民間企業」（68.2%）志望が圧倒的に高く、2位の「大学院進学・研究継続（大学院学生の回答の場合は、修士から博士、あるいは他の大学院への進学と思われる）」（11.4%）以外は数%程度です。これに対して理系大学院の進路はバラエティーに富んでおり、1位「民間企業」（25.0%）、2位「大学院進学・研究継続」（22.7%）、3位「大学教員」（15.9%）、4位「公務員」（9.1%）および「各種資格試験受験」（9.1%）となっています。

(3) 将来に向けての準備

では、上記の進路に向けて早大生はどんな準備をしているのでしょうか。最も多いのはオーソドックスに「学問研究に励む」(44.8%)です。以下、「特になし」(15.7%)を除く具体的な準備として目立ったところでは、「留学・語学習得」(25.6%)、「資格試験対策」(21.8%)、「コンピュータ技術習得」(14.4%)、「部・サークル活動の充実」(12.3%)、「人脈作り」(11.3%)と続きます。男女ともこれら項目の順位はほぼ同じですが、女性の方が男性よりも「留学・語学習得」が7.6ポイント、「資格試験対策」が5.5ポイント高いのに対して、男性は「学問・研究に励む」、「コンピュータ技術習得」が女性よりもそれぞれ3.7ポイント、4.9ポイント高くなっています。どちらかというと女性の方が具体的な準備を心がけているようです。



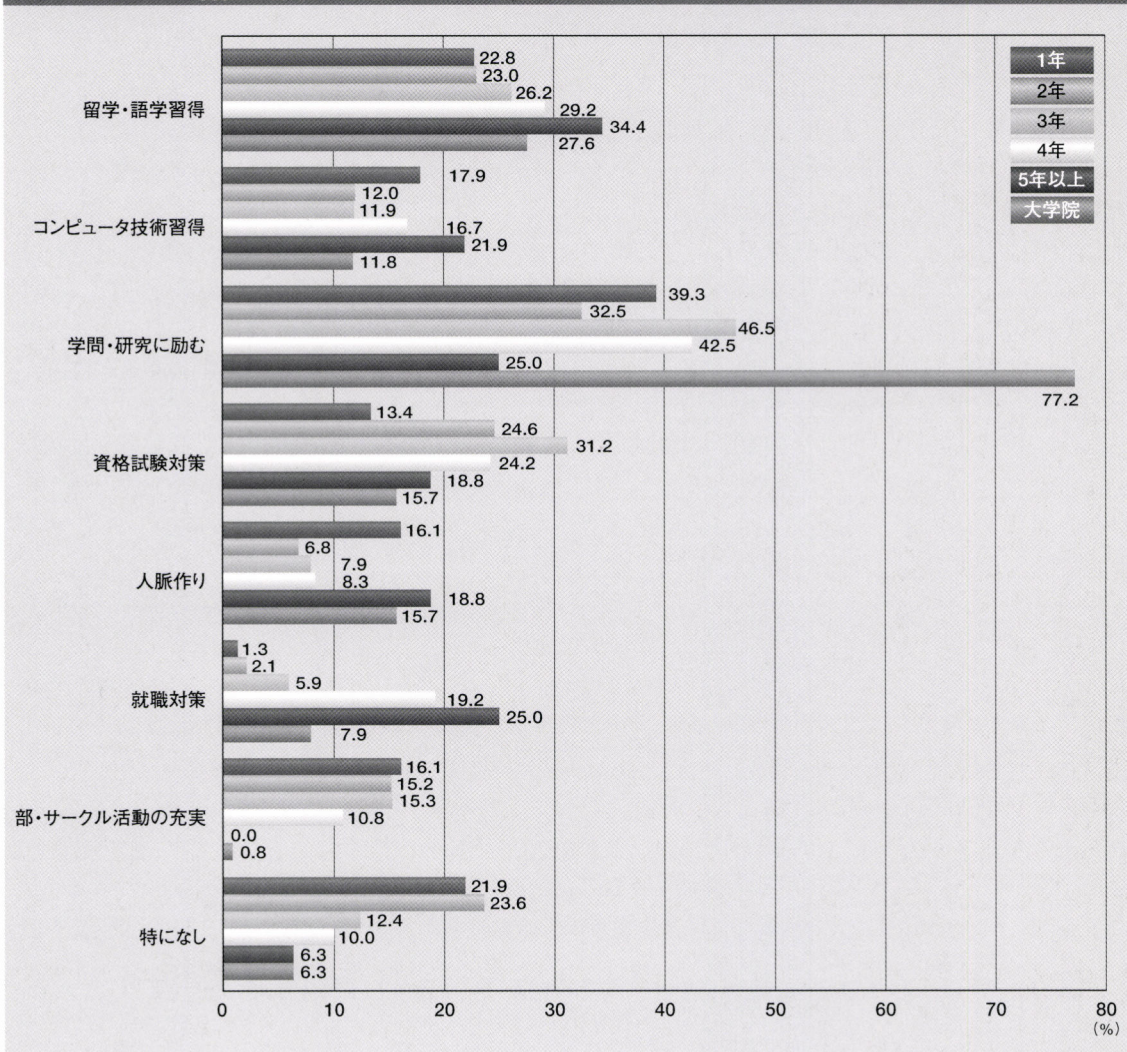
文系、理系では学問系統の違いを反映し、順位が若干異なります。1位は文系・理系ともに「学問・研究に励む」ですが、理系(58.7%)の方が文系(42.0%)より16.7ポイントも高いです。この点は、＜キャンパス・ライフの充実の鍵＞(P.30のグラフを参照)のところで、理系の方が「専門知識・研究を深める」のポイントが文系よりも15.7ポイント高かったことと一致しており、理系の学問重視の傾向を裏付けています。2位以下では、文系が「留学・語学習得」(26.9%)、「資格試験対策」(24.7%)と続くのに対して、理系では2位「コンピュータ技術習得」(25.3%)、3位「留学・語学習得」(18.7%)となっており、学問分野の違いを反映しています。ちょっと興味深いのは、両者とも「部・サークル活動の充実」が4位でポイントもほぼ同じであることです。



学年による違いも興味深いです。各学年を通じて1位は「学問・研究に励む」で、1年39.3%、2年32.5%、3年46.5%、4年42.5%と基本的に高学年になるほど高くなり、大学として望ましい傾向を示しています。当然のことながら、大学院学生では77.2%とダントツの高さとなります。

「資格試験対策」は1年の13.4%が学年が上がるにつれ高くなり、3年で最高の31.2%になります。「コンピュータ技術習得」が、1年では17.9%なのに比べて、2年で12.0%、3年で11.9%とやや落ち込んだ後、4年で16.7%と持ち直すのは、入学時が大学での勉学上の必要性、4年では就職活動に関わるニーズのためと考えられます。当然のことながら、「就職対策」は3年から5.9%と伸び始め、4年で19.2%と急増しています。この点は、いわゆる青田刈りが進むことで、さらに低学年化する可能性もありえます。

現在、将来の進路に向けてどのような準備をしていますか？（学年別）（複数回答可）

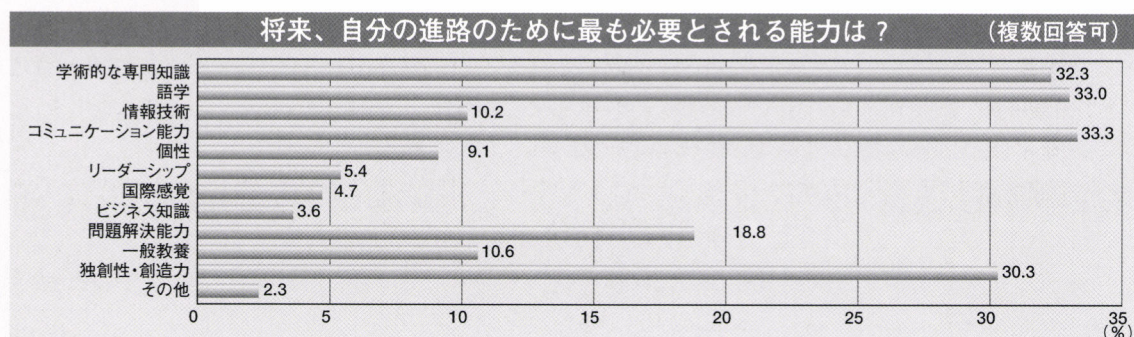


逆に、「部・サークル活動の充実」は、1年から3年までは15.0%前後と安定していますが、4年になると10.8%に落ち込みます。「部・サークル活動の充実」は将来の進路に直接的に影響する要因というよりも、学生時代のプロセスに影響を及ぼす要因と言えるのかもしれません。また、「人脈作り」は、1年では16.1%と一定の支持を集めますが、2年から4年では半減しています。1年の時には大学での「人脈作り」という直接的なニーズがあるのに加えて、将来設計がはっきりしていないために漠然と「人脈」というものを強く意識するのかもしれません。反対に、「留学・語学習得」は学年が上がるごとに尻上がりに増え、各学年を通じて20.0%台の前半から後半の安定した関心を集めていることが分かります。

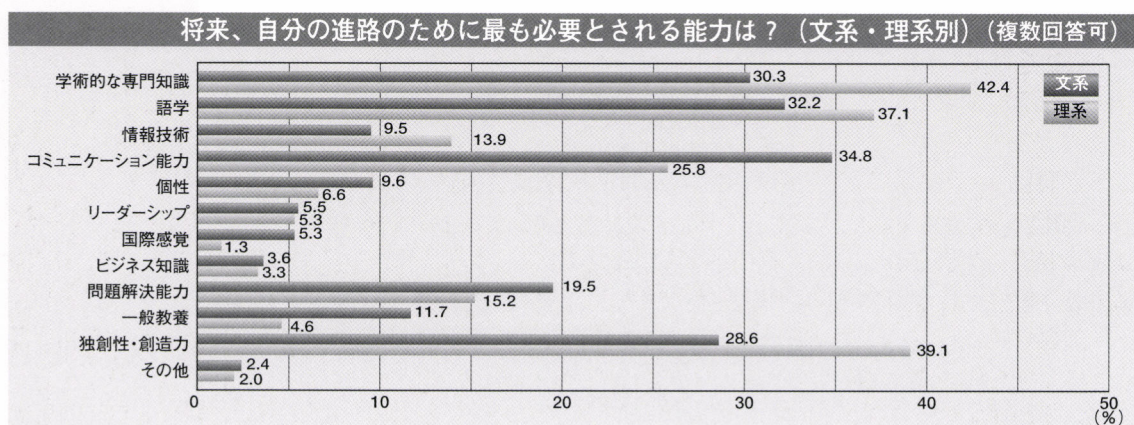
これらの結果から、1年の時に漠然としていた進路が2年次から3年次にかけて決まることがうかがえます。このことは、1年の時に21.9%であった「特になし」が2年23.6%、3年12.4%、4年10.0%と確実に減少することからも判断できます。

(4) 将来に向けて必要な能力

前述のような準備をするにあたり、早大生はどんな能力が必要と考えているのでしょうか。まず全体では、「コミュニケーション能力」(33.3%)が1位、これに「語学」(33.0%)、「学術的な専門知識」(32.3%)、「独創性・創造力」(30.3%)が少差で続きます。これら4項目以外で10.0%以上の支持を得たのは、5位「問題解決能力」(18.8%)、6位「一般教養」(10.6%)、7位「情報技術」(10.2%)です。



「語学（この場合は外国語能力が主）」が「コミュニケーション能力」を支える重要なヒューマン・ファクターであることを考えると、圧倒的多数が広い意味でのコミュニケーション能力を重要視していることが分かります。学年別でも「コミュニケーション能力」「語学」を中心に「学術的な専門知識」「独創性・創造力」を加えた4項目が、若干の順位の変動はあるにせよ常に上位を占めています。また「情報技術（IT）」が、グローバル情報時代においてコミュニケーション能力を発揮するための必要不可欠なインフラであることを考えると、早大生がコミュニケーション、語学、情報といったソフト的要素を、いかに重要視しているかが明確に見て取れます。さまざまな就職関連の調査も指摘するとおり、現在の日本の社会、企業やその他組織において、コミュニケーション能力がリクルートにおける最重要ポイントの1つになっていることとも連動しています。この点は、学年別にみて4年生が「コミュニケーション能力」41.0%を最も重視していることから裏付けられます。

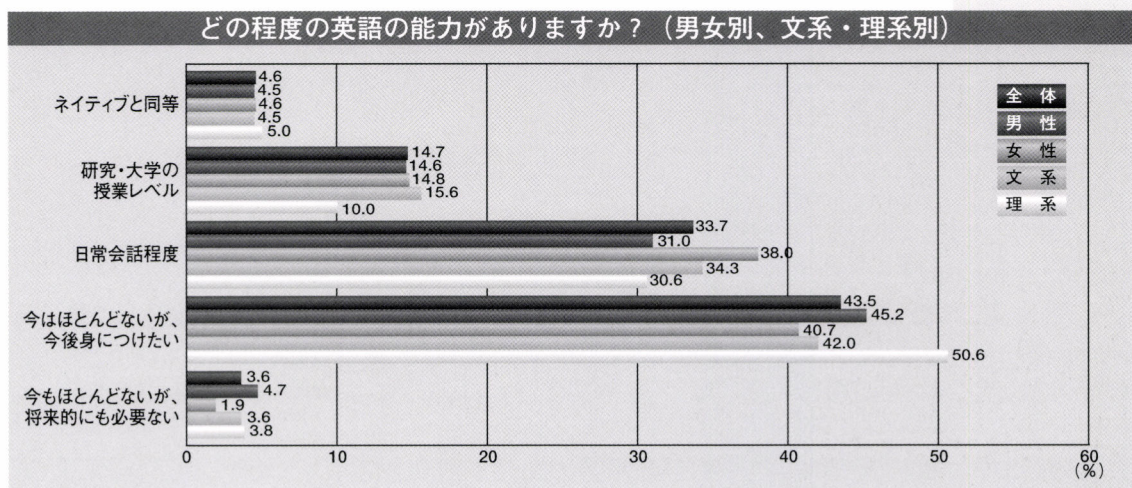


文系と理系とでは上位5項目は同じでも、その順位にはかなりの相違が見られます。文系では1位「コミュニケーション能力」(34.8%)、2位「語学」(32.2%)、3位「学術的な専門知識」(30.3%)、4位「独創性・創造力」(28.6%)、5位「問題解決能力」(19.5%)であるのに対し、理系では1位「学術的な専門知識」(42.4%)、2位「独創性・創造力」(39.1%)、3位「語学」(37.1%)、4位「コミュニケーション能力」(25.8%)、5位「問題解決能力」(15.2%)となっており、前述のとおり、文系のコミュニケーション能力重視と、理系の学術的専門知識と独創性重視が浮き彫りになっています。

いずれにせよ、不確実の多い現在のグローバル社会においては広い意味でのコミュニケーション能力と並んで「問題解決能力」が重要視されている現状を考えると、文系、理系ともに「問題解決能力」が5位にランクされているのが少し気になると思います。興味深いのは、「国際感覚」が文系・理系ともに低いことです。いまや国際性も「感覚」という漠然とした問題ではなく、上記のような具体的な能力の結集によって裏付けられなくてはならないという意識が一般化しているのでしょうか。

(5) 英語能力

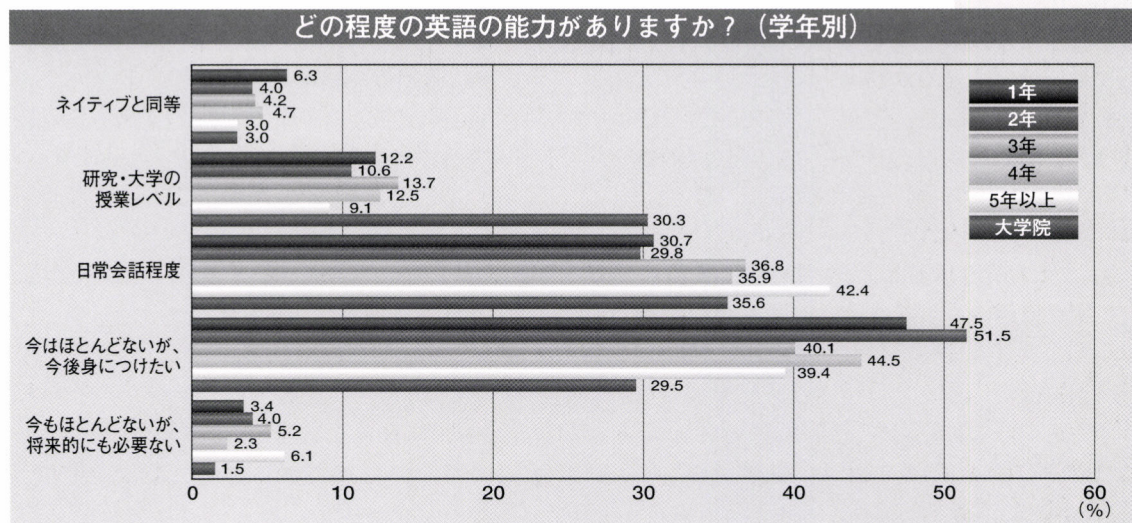
残念ながら、国際コミュニケーション能力の土台を成す英語能力については、皆さんあまり自信がないようで、「今はほとんどないが、今後身につけたい」が43.5%と最も多くなっています。以下、「日常会話程度」(33.7%)、「研究・大学の授業レベル」(14.7%)、「ネイティブと同等」(4.6%)、「今もほとんどないが将来的にも必要がない」(3.6%)と続きます。「ネイティブと同等」は無理にしても、「研究・大学の授業レベル」も低いのが気になります。もっともこれは自己申告ですので、必ずしも実際の能力を反映しているわけではありません。一般に英語能力などの自己申告は、本来の能力よりも高く言いがちな場合が多く、信頼性に乏しいものですが、早大生は逆に控えめな自己申告をしているものと期待したいところです。



男女別では、「ネイティブと同等」と「研究・大学の授業レベル」はほぼ同じですが、「日常会話程度」では男性が31.0%なのに対し、女性は38.0%と7ポイントも高くなっています。また、「今もないが将来的にも必要がない」と答えた人は、男性が4.7%もいるのに対して女性は1.9%しかいません。英語力に関しては女性の方がやや優れている、あるいは少なくとも積極的であるようです。

文系・理系の差はどうでしょうか。項目の順位はまったく同じですが、文系の方が「研究・大学の授業レベル」において5.6ポイント高く、「日常会話程度」も3.7ポイント高くなっています。文系学生の方が理系学生よりもやや英語力重視なのかもしれません。

学年別では、項目の順位はほとんど変わりませんが、学年が上がるにつれて、「日常会話程度」のポイントが若干上がり、「今もないが将来的にも必要がない」のポイントが下がる傾向にあります。大学院学生ではさすがに「研究・大学の授業レベル」および「日常会話程度」のポイントがそれぞれ30.0%を超えており、「今もほとんどないが、将来的にも必要ない」は1.5%しかいません。大学院学生は留学生の比率が学部より高いので、留学生の存在がプラス要因になっているのかもしれません。



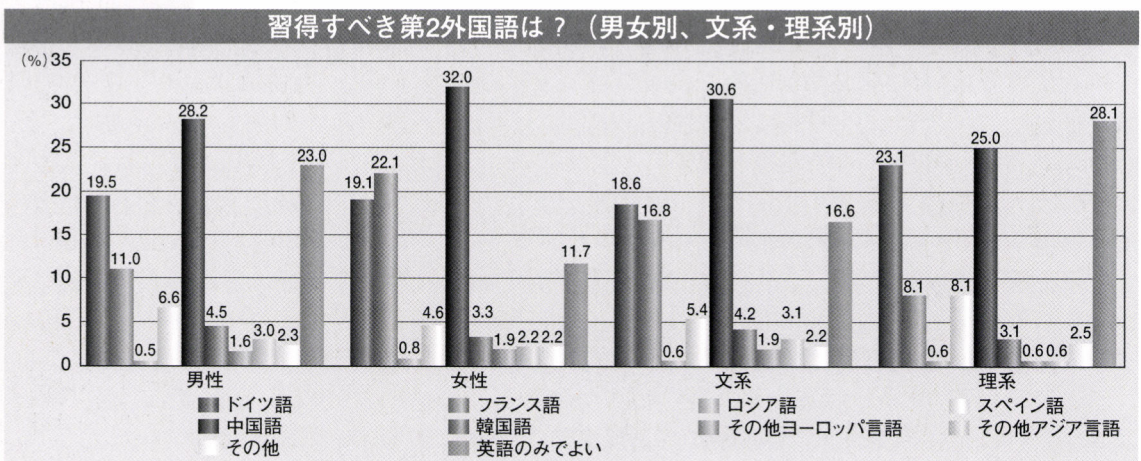
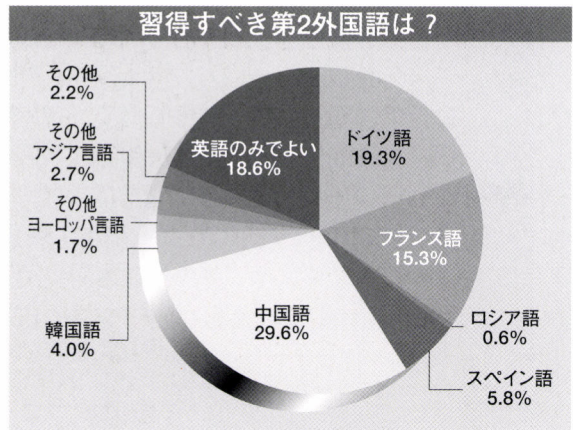
(6) 必要第2外国語

国際コミュニケーション能力は英語に限られるわけではありません。第2外国語として、早大生はどんな言語を重要視しているのでしょうか。

やはり圧倒的な人口の巨大さに加えて、今世紀最大の発展市場と目される中国のインパクトは大きく、早大生のほぼ3人に1人(29.6%)が「中国語」を重要視しています。かつては第2外国語の筆頭と言えば「ドイツ語」もしくは「フランス語」だったのですが、両者とも20.0%を切り、「中国語」と水が開いています。一般に、学生がどの外国語を重視するかは、国

際社会におけるその国のプレゼンスの大きさを反映すると同時に、日本社会の関心がどの国に向いているかを反映していることを考えると、グローバル時代の変化の激しさを実感させます。

「中国語」の台頭は先に説明したとおりですが、「ドイツ語」が「フランス語」より4ポイント高いのはEU統合、ベルリンの壁崩壊とドイツ統一、さらには東ヨーロッパの自由化の影響でヨーロッパの中心軸がより東に移ってドイツになりつつあることの影響かもしれません。男女別、文系・理系別の統計の中で、「ドイツ語」より「フランス語」を重視しているのが女性だけであるのも興味深いです。反面、グローバル時代のもう一つの傾向として、「英語のみでよい」(18.6%)が3位となっています。「英語」と「中国語」だけで、世界のかなりの部分をカバーできるということなのかもしれません。



「中国語」重視は男女双方に顕著な傾向ですが、女性(32.0%)の方が男性(28.2%)より4ポイント近く高いです。以下、男性が2位「英語のみでよい」(23.0%)、3位「ドイツ語」(19.5%)、4位「フランス語」(11.0%)であるのに対して、女性では2位「フランス語」(22.1%)、3位「ドイツ語」(19.1%)、4位「英語のみでよい」(11.7%)となり、順位にかなりの相違があります。女性が男性に比べ、依然「フランス語」に倍の支持率を示すのは、ファッションと芸術の国フランスのイメージも一因でしょうが、「英語のみでよい」が男性の半分であることから判断すると、女性の方がさまざまな外国語をバランスよく支持していると見ることができます。

文系・理系の比較では、文系が「中国語」(30.6%)を1位に挙げているのに対して、理系は「英語のみでよい」(28.1%)が1位で、文系よりも12ポイント近く高いのと同時に、「中国語」が文系より5ポイント近く低いのが目につきます。また、「ドイツ語」では理系が23.1%と文系の18.6%より4.5ポイント高いのですが、逆にフランス語では8.1%と文系の16.8%の半分以下であるのも特徴です。科学・技術の分野では文化の影響が比較的小さいため、理系では「英語のみでよい」という傾向が強くなるのでしょうか。同様に、理系でドイツ語がフランス語よりも強い影響力をもっているのも、学問分野の相違の影響かもしれません。

総合的には女性より男性、文系より理系が「英語のみでよい」というグローバル・スタンダード的志向が強いようです。